

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00984

研究課題名（和文）市島春城およびその関連史料の総合的研究

研究課題名（英文）The Comprehensive Study of Shunjo Ichijima and Related Historical Materials

研究代表者

真辺 将之（Manabe, Masayuki）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80546721

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：最大の成果は早稲田大学図書館所蔵の市島春城文書の総目録の作成を目指し、合計3900点近くにのぼる市島旧蔵資料の目録化を進めることができたことである。目録を社会に発信するべく今後準備を進めていきたいと考える。わたる新潟県立図書館旧蔵資料の移管状況ならびに現所蔵状況を確認することができた。さらに文書の内容についても解説を進め、インデックスを作成する作業を行った。その結果、早稲田大学史および大隈重信に関連する内容を多く把握することができ、その成果の一部は研究代表者が執筆・編集に参加した『早稲田大学百五十年史』第一巻にも活かすことができた。今後はさらなる同文書の活用、翻刻に向けて努力を重ねていきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、市島春城文書の目録が整備されることで、全容の不明であった同文書の全体像が明らかになった。今後細部のチェックを経たうえでその目録を社会に提供することができれば、多くの研究者にとって有用なツールを提示することにつながり、さらなる学術研究の呼び水となることは間違いない。また同文書は政治・教育・文化など、さまざまな分野にまたがるものであり、その学術的成果が社会の諸分野の来歴を考えるうえにおいても、活用されることは間違いなく、その意味で社会的な意義を有していると考えている。

研究成果の概要（英文）：The greatest achievement was aiming to create a comprehensive catalog of the Ichijima Shunjo documents held by the Waseda University Library, and successfully cataloging nearly 3,900 items from the Ichishima collection. We plan to continue preparations to make this catalog available to the public. Additionally, we were able to confirm the transfer status and current holdings of the materials formerly held by the Niigata Prefectural Library. Furthermore, we progressed in deciphering the contents of the documents and created an index. As a result, we were able to identify many contents related to the history of Waseda University and Shigenobu Okuma. Some of these findings were incorporated into the first volume of "The 150-Year History of Waseda University," in which the principal researcher participated as an author and editor. Moving forward, we will continue our efforts to further utilize and transcribe these documents.

研究分野：日本近現代史

キーワード：早稲田大学 大隈重信 市島謙吉 市島春城 立憲改進黨 進歩党 憲政党 憲政本党

1. 研究開始当初の背景

今日までの政治史研究は、藩閥政府や、自由党とその後身である立憲政友会を中核に描かれることが多かった。その理由は、それら勢力が政権担当者として政局の主導権を握っていた期間が長かったからであると同時に、それら勢力の側に関わる多くの史料が遺されている(公文書はもちろん、私文書でも伊藤博文や原敬にかかわる膨大な史料群が遺されている)のに対し、大隈系、つまり、立憲改進黨・進歩党・憲政本党・立憲同志会・憲政会に至る流れの政党の側の史料はそれらに較べると、非常に少ないという事情が存在していた。とりわけ、これら政党の党首格であった大隈重信は、自ら文字を書かない人物であったこともあり、大隈自身の考えを窺うことができる一時史料の残存状況は非常に少ない。

こうした状況に対して寄与することのできる史料群が早稲田大学に存在する。市島春城(謙吉)の遺した史料群である。その点数は約1000点にのぼり、市島自筆の日記・覚書・雑録・随筆・貼込帖をはじめ、市島宛の書翰、市島が知人や古物商から購入した文書類などをも含め膨大な量にわたっている。市島の遺した史料には、政治史・文化史にわたる豊富な情報が盛り込まれているが、これまであまり活用されていない。これらの史料を活用して、市島が日本近代政治史・文化史上に果たした役割を検討することは、大きな学術的な意味を持つものであると考える。以上のような学術的背景のもと、応募者は、この市島資料を活用しつつ、市島の多面的な活動を明らかにする必要があると考え、本研究に着手しようとするに至った。

2. 研究の目的

今日までの政治史研究は、藩閥政府や、自由党とその後身である立憲政友会を中核に描かれることが多かった。その理由は、それら勢力が政権担当者として政局の主導権を握っていた期間が長かったからであると同時に、それら勢力の側に関わる多くの史料が遺されている(公文書はもちろん、私文書でも伊藤博文や原敬にかかわる膨大な史料群が遺されている)のに対し、大隈系、つまり、立憲改進黨・進歩党・憲政本党・立憲同志会・憲政会に至る流れの政党の側の史料はそれらに較べると、非常に少ないという事情が存在していた。とりわけ、これら政党の党首格であった大隈重信は、自ら文字を書かない人物であったこともあり、大隈自身の考えを窺うことができる一時史料の残存状況は非常に少ない。

こうした状況に対して寄与することのできる史料群が早稲田大学に存在する。市島春城(謙吉)の遺した史料群である。その点数は約1000点にのぼり、市島自筆の日記・覚書・雑録・随筆・貼込帖をはじめ、市島宛の書翰、市島が知人や古物商から購入した文書類などをも含め膨大な量にわたっている。市島の遺した史料には、政治史・文化史にわたる豊富な情報が盛り込まれているが、これまであまり活用されていない。これらの史料を活用して、市島が日本近代政治史・文化史上に果たした役割を検討することは、大きな学術的な意味を持つものであると考える。以上のような学術的背景のもと、応募者は、この市島資料を活用しつつ、市島の多面的な活動を明らかにする必要があると考え、本研究に着手しようとするに至った。

具体的には、本研究では市島の活動や史料の分析を通じて、下記の研究目的を設定して研究を進めていきたい。すなわち、(1)大隈系政党の活動の内容を詳細に検討し、そこにおける市島春城の役割を明らかにする。(2)市島春城の文化的活動の実態を明らかにし、市島がかかわった諸団体の日本近代史上における位置を明らかにする。(3)以上の政治活動と文化的活動とがどのように結びついていたのかの検討を通じて、この両者の結びつきの結節点となった市島、さらには市島が支えた大隈重信や大隈系政党の活動を、文化と政治との複合的視野のなかで位置付ける。この3点が本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は膨大な史料を活用しながら、市島の政治と文化の両面を把握しようとする非常に遠大な課題を抱えている。そこで、以下の手順で研究を進めていくこととした。

まず最初に、前述した3点の目的を達するための作業として、市島が遺した膨大な史料について、早稲田大学図書館所蔵の資料はもちろん、それ以外の機関に所蔵されている史料も含めて、網羅的な目録を作成する。早稲田大学図書館の古典籍総合データベースや、WINEシステム、早稲田大学図書館和漢図書分類目録、さらには早稲田大学中央図書館特別資料室備付のカード目録なども含め、市島旧蔵の史料を網羅的にエクセルに入力する作業を行った。そのための研究補助者を雇用し、市島旧蔵の史料を網羅的に入力してもらい、応募者が最終のチェックを行うことで完成を目指した。

また以上の目録情報をふまえ、実際に史料の内容の検討に入る。その際、研究補助者2名を雇用し、特に情報量が豊富であると考えられる雑記類についての内容のインデックスを作成し、重要部分については翻刻を作成することとした。

さらに、翻刻を通じての史料の検討と併せて、市島の諸活動の実態の詳細を明らかにしていく

作業を行うことを計画していた。特に、文化的活動を通じての人脈が、政治的活動とどのように連関しているか、また文化的活動を通じて流れる理念が、政治活動における政治理念とどのような連関を有しているかについて検討を行うことで、両者の連関を深く探っていくことを考えた。それとともに市島史料の雑記類・書簡類の将来的な出版ないしデジタル化を視野に入れて、基盤の整備を行っていくこととした。

4. 研究成果

本研究遂行中に、新型コロナウイルスの流行や研究補助者の妊娠・出産という予期しない自体が起こったために、研究補助者による作業が遅れがちとなり、当初の史料目録の作成が長引くことになった。とはいえ、最終年度までに、旧蔵資料のみならず旧蔵目録も含めた早稲田大学図書館所蔵のデータを網羅的に入力し終えたことは一番大きな成果として特筆できると考える。このデータは、合計 3900 点近くにのぼるものであり、市島の日記・雑記・書簡のみならず、書籍などの旧蔵資料も網羅的に含むものである。これと同時に、新潟県立図書館に旧蔵されていた市島春城文書の一部が、同図書館にまだ残存していることから、同図書館の旧蔵目録をもとに、その後早稲田大学図書館に移管されたものを調べるとともに、新潟県立図書館に出張して残存状況を調べることを行った。この結果、500 点近くにわたる新潟県立図書館旧蔵資料の移管状況ならびに現所蔵状況を確認することができた。今後、最終的なチェックを下手うえて、以上の目録を Web もしくは紙媒体の形で広く成果を発表し、他の研究者にとっても資料使用の基盤を整えたいと考えている。このことは、応募者の研究のみならず、日本近代史研究自体の基盤の拡大に寄与することができると確信している。また、本研究の結果として翻刻の一般公開の基盤が整い、将来的に活字化ないしデジタル翻刻の公開が実現すれば、それは専門的な研究者だけでなく、くずし字読解能力を持たない他分野の専門家や、一般国民にも広くその利用可能性を開くことにつながり、科学研究費補助金の成果の社会への還元につながるであろうと考える。

雑記類の史料インデックスについての作成も併行しておこなったが、これも、市島文書の量が膨大であることから、早稲田大学・大隈重信関係のピックアップが中心となり、市島の文化的事業を網羅的にピックアップするまでには至らなかった。とはいえ、明治期の市島の雑記録についてはほぼ目を通すことができた。その他派生的な研究成果は、研究成果発表報告書に記載した通りであるが、代表的なものとしては、筒井清忠編『大正史講義』（ちくま新書）に「大隈内閣成立と大隈ブーム」を執筆したほか、読売新聞社 WasedaOnline に記事「渋沢栄一と大隈重信」を執筆、青山学院史研究所開設記念シンポジウム「学校史・大学史研究の可能性」にて「早稲田大学 150 年史編纂事業について」を報告、一般社団法人尚友倶楽部にて講演「大隈重信と早稲田大学 明治 14 年の政変と総長としての大隈」を講演録形式で行するなど、市島日記を用いた研究をさまざまに発表することができた。最大の成果といえるのは『早稲田大学百五十年史』第一巻の刊行である。個人の著作物ではないが、研究代表者の執筆部分はもちろん、それ以外の部分においても資料情報を提供することによって、記述に大きく本研究によって得た知見を反映させることができた。このほか、佐賀市主催の大隈祭にて、「大正時代の"大隈ブーム" 新時代の幕開け」と題する講演をおこなって、研究成果の一部を社会に還元することができた。

た。その講演内容は『早稲田大学史記要』にて活字化されたほか、小林和幸編『思想史講義 明治編』（ちくま新書）に「自由民権」と題する論考を、小林和幸編『東京 10 大学の 150 年史』（筑摩選書）に「早稲田大学一〇〇年史」と題する論考を発表し、本研究による成果の一部を盛り込むことができた。このほか、関連する実績としては、『南日本新聞』連載記事「明治 14 年政変と五代友厚」に関連して、同新聞記者による取材を受けてコメントを行うことによって、研究の社会的な還元を行った。また資料を検討するなかで、市島春城の随筆類などについても、他の同時代の文筆家の随筆と比較する形で比較随筆研究のような研究もできることに気づき、同時代の文筆家の随筆を収集し、市島のものと比較しながら、その同時代における相似と相違、および明治大正昭和期における随筆の持つ意味について考察する作業にも着手することができた。研究成果を生み出すにはまださななる時間が必要であるとは考えるが、しかし今後長期間にわたって、今回の科研費の成果を活かすことができる基盤の整備はできたと考える。

市島春城の名前は、一部の政治史・文化史研究者には知られているものの、世の中に幅広く知られているとはいえない。しかし、市島は『高田新聞』『読売新聞』の主筆として論陣を張り、また大隈重信の側近として政治活動を行って 3 期にわたって衆議院議員をつとめ、また他方で早稲田大学の経営に幹部として携わり、特に図書館の充実に力を果たした。大隈の死去にあたってはその葬儀委員長を務めたほか、伝記『大隈侯八十五年史』の編纂や、大隈が遺した「大隈重信関係文書」の整理・保存に中核的にかかわった。また国書刊行会や文庫協会、大日本文明協会、『大日本地名辞書』の刊行等、数多くの文化的活動に携わり、随筆家として数多くの書籍を刊行するなど、近代日本政治史・文化史に遺した足跡は決して小さくない。にもかかわらず、今日まで、市島に関する研究は、書誌的・年譜的なもの以外には、ほとんどなされていないのが現状である。このようななか、その情報量の豊富さに比して、今日までさほど活用がなされてこなかった市島の旧蔵資料の目録が網羅的に整備できたことは、今後の研究代表者の研究の進展のみならず、広く日本近代史研究の基盤整備に寄与し、今後の新たな研究の呼び水となりうるであろう。こうした意味において、本研究は大きな創造性を持っていると考える。

明治から昭和戦前期の日本社会は、圧倒的に「政治」優位の社会であった。西洋各国に遅れて近代化したという状況から、西洋諸国にキャッチアップすべく、政治にかかわる人物が、文化の世界においても大きなリーダーシップをとって、その発展に関与しようとした。明六社の同人の多くが官僚でもあったこと、自由民権運動の政治家が、新聞・雑誌等のメディアの発展に寄与したこと、近代日本の出版事業、たとえば『百科全書』『古事類苑』や『言海』等の出版事業に政府や政治家が大きく関与していたことなど、多くの事例を挙げることができる。本研究の研究対象となる市島春城は、大隈重信の側近として大隈系政党に関わり続けたが、大隈系政党は政権から疎外されていた期間が長い。かつ、大隈重信は、メディアや文化的活動を意図的に活用し、自らの政治的リソースとして活用した人物でもあり、大隈の側近としての市島もまた、政治と文化とのかかわりをそれなりに意識して活用していたものと考えられる。今回の研究成果をもとに、市島春城の政治と文化両面にわたる活動を、相互に関連させて検討する端緒が開かれたものと考え、今後さらにこの基盤のもとに研究を進めることによって、大隈および大隈系政党の活動と、文化的活動とがいかなる連関を以て展開されてきたのかを問うことも可能となるであろう。このことは、政治的背景を抜きにして語られがちな文化史研究と、細かな政局史的叙述に陥りがちな政治史研究との間にあって、その両者の橋渡しを行うという意味で、大きな意味を持っていると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 54
2. 論文標題 大正時代の"大隈ブーム" 新時代の幕開け	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学史記要	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 真辺将之	4. 巻 54
2. 論文標題 『早稲田大学百五十年史』第二巻の方向性について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学史記要	6. 最初と最後の頁 127-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 真辺将之	4. 巻 853
2. 論文標題 中野目徹編著『官僚制の思想史』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 104-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 真辺将之	4. 巻 52
2. 論文標題 田中友香理著『優勝劣敗 と明治国家 加藤弘之の社会進化論』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 182-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 59
2. 論文標題 明治維新和政党認識 日本近代史上政党的"部分性"和公共性・愛国主義的矛盾	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中山大学学報社会科学版	6. 最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 2019
2. 論文標題 歴史からみた早稲田大学 早稲田精神とは何か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学募金広報誌 NEWS LETTER	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 33
2. 論文標題 大隈重信憲法意見書再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 自由民権	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 55
2. 論文標題 近現代日本における猫への眼差し 室生犀星・谷崎潤一郎を題材に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 11
2. 論文標題 室生犀星と猫 犀星は果たして「猫好き」なのか？	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Waseda Rilias Journal	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真辺将之	4. 巻 69
2. 論文標題 井上哲次郎研究の現状と課題	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 253-271
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 真辺将之
2. 発表標題 近現代日本における猫への眼差し 「猫好き」とは何か？
3. 学会等名 日本思想史学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 真辺将之
2. 発表標題 早稲田大学150年史編纂事業について
3. 学会等名 青山学院史研究所開設記念シンポジウム「学校史・大学史研究の可能性」 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真辺将之
2. 発表標題 大隈重信と早稲田大学 明治14年の政変と総長としての大隈
3. 学会等名 一般社団法人尚友倶楽部日本近現代史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真辺将之
2. 発表標題 朝河貫一と東京専門学校
3. 学会等名 朝河貫一生涯150年記念シンポジウム「朝河貫一の時代と学問 福島・早稲田・アメリカ」（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 山口輝臣、福家崇洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 思想史講義【明治篇】	

1. 著者名 小林和幸	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 東京10大学の150年史	

1. 著者名 早稲田大学百五十年史編纂委員会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 早稲田大学出版部	5. 総ページ数 1554
3. 書名 早稲田大学百五十年史第一巻	

1. 著者名 筒井清忠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 512
3. 書名 大正史講義	

1. 著者名 NHK出版	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 青天を衝け 渋沢栄一とその次代	

1. 著者名 小林 和幸	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 明治史研究の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------